

第 24 期-第 1 回 心理学・教育学委員会 社会のための心理学分科会 議事要旨

(文責:高瀬堅吉)

日時: 平成 30 年 4 月 8 日 13:00~15:00

場所: 東京大学本郷キャンパス教育学研究科・教育学部棟第 1 会議室(東京都文京区本郷 7-3-1)

出席者: 箱田裕司、中島祥好、原田悦子、蒲池みゆき、仲真紀子、村田光二、阿部恒之、池上知子、高瀬堅吉、河原純一郎、遠藤俊彦(11 名)

欠席者:長谷川寿一、桑野園子(2 名)

<議題>

1. 役員の選出
2. 第 24 期活動計画
3. その他

<審議内容>

1. 役員の選出

はじめに、遠藤委員、箱田委員、原田委員より、本分科会の役割(参考:<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/bunya/sinri/pdf/syakaisinri-setti24.pdf>)と前期までの審議経過について説明があった。次に、坂本真士氏が本分科会に参加予定であったが、参加が困難となったことについて説明があり、その旨が承認された。その後、役員の選出について、互選により委員長に中島祥好委員、副委員長に蒲池みゆき委員、幹事に河原純一郎委員、高瀬堅吉委員の選出があり、承認された。

2. 第 24 期活動計画

今後の計画を考える上で、委員からの自由な議論が行われた。主な意見は以下の通り。

・「日本心理学会公開シンポジウム『心理学で冤罪を防ぐ。司法的判断における認知バイアスの影響』世話人:伊東裕司氏・仲真紀子氏他、登壇者:巖島行雄氏・桐生正幸氏他、10/13 京都女子大学開催・12/10 慶応義塾大学開催」を分科会として後援してはどうか。当該シンポジウムは、法と心理学分科会も後援となっている。4/23 に日本学術会議の幹事会が開催されるため、それまでに後援の可否について意見をまとめたい。

・各委員が所属する学会で Gender Equality Association for Humanities and Social Sciences(GEAHSS 略称ギース)への参加を呼び掛けてはどうか。GEAHSS の概要についてはこちら(<https://geahssoffice.wixsite.com/geahss/geahss>)を参照されたい。

・公認心理師に関する事項は、健康・医療と心理学分科会が中心となって活動しているので、当分科会では、現在、日本心理学会が運営している認定心理士の会の活動に関与してはどうか。認定心理士の概要についてはこちら(<https://psych.or.jp/qualification/>)、認定心理士の会について

はこちら(<https://psych.or.jp/authorization/ninteinokai>)を参照されたい。具体的には、認定心理士の会が開催するイベントと連携して活動してはどうか。

・シチズンサイエンスを積極的に展開してはどうか。シチズンサイエンスについてはこちらの論文(<http://www.nistep.go.jp/wp/wp-content/uploads/NISTEP-STT150J-21.pdf>)を参照されたい。日本学術会議若手アカデミーイノベーションに向けた社会連携分科会が、7/28(土)13:30~16:30に日本学術会議講堂で、シチズンサイエンスに関する公開シンポジウム「若手アカデミーが考えるシチズンサイエンスに基づいた学術横断的社会連携」を開催予定である。既に日本心理学会も共催となっている。本分科会もそれを後援してはどうか。こちらの企画は日本学術会議の幹事会で承認を得ている。シチズンサイエンスを展開することで、心理学の再現性問題の解決、市民の心理学リテラシーの向上が期待される。

・学問としての心理学がどのようなかたちで社会において役立つのかを公開シンポジウムなどを通じて示すのが良い。

・学問としての心理学からの情報発信の不足、情報発信のスピードの遅さを感じる。そのため、社会に向けた情報発信のありかたを当分科会で考えていきたい。また、その活動を通じて「心理学の危機(学問としての心理学の在り方の危機)」を考えていく契機をつくってほしい。

・企業との共同研究などについて、連携をスムーズにするためにはどのようにしたらよいかを考えていきたい。

・学問としての心理学が社会に適切に伝わっていないことに危機を感じている。また、大学院生が心理学ではなく神経科学に流れて行ってしまうことにも、担い手の不足という点で危機を覚える。心理学のこれからの担い手に、科学としての心理学を適切に伝えていきたい。具体的には小中高生を対象に、心理学はどのような学問かということ伝えてほしい。また、心理学を学んだ人たちのキャリアパスを開拓していきたい。そのためには、社会に対して、心理学を学んだ人材が備える知識、技術などを公表していきたい。

・国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の関係者と話したが、彼らは心理学の存在は知っているが、どう役立つかを知らない。一度、心理学諸学会で行っている社会貢献活動を整理してはどうか。楠見孝氏とも連携して、社会貢献活動の情報を集約して、現状を把握してはどうか。

・これまでの公開シンポジウムは、費用(労働)対効果の観点から開催にポジティブな効果があったとは言い難い。「社会」は広い概念なので、情報発信ツールとしてのシンポジウムは、心理学を知らない人、とりわけ政策決定者、企業的意思決定者向けに開催する必要がある。また、ビジネススクールなどの社会が求める人材養成の場に、心理学者が貢献するような機構作りが必要である。

・公認心理師に関する事項は、健康・医療と心理学分科会が中心となって活動しているので、当分科会では、中学生、高校生に心理学を知ってもらう機会を作ったほうが良い。特に高校の進路指導担当の先生向けに心理学を紹介するのはどうか。また、社会貢献を志向する企業と

自身が連携する中で、心理学のニーズが高いことを感じているため、そういった企業との意見交換を行うことが必要であると感じる。

- ・企業側は心理学がどう役立つかがわかっていない。ただ役立ちそうな雰囲気を感じてはくれている。

- ・心理学のロゴをつくり、心理学の発表を行う方にはそれを各発表で提示してもらう。これにより、心理学の広がりや量を定量することが可能になる。

3. 今後の予定

- ・「日本心理学会公開シンポジウム『心理学で冤罪を防ぐ。司法的判断における認知バイアスの影響』世話人:伊東裕司氏・仲真紀子氏他、登壇者:巖島行雄氏・桐生正幸氏他、10/13 京都女子大学開催・12/10 慶応義塾大学開催」について、当分科会が後援する旨を 4/23 に開催される日本学術会議の幹事会に提案する。(仲委員)

- ・各委員が所属する学会で GEAHSS への参加を呼び掛けるための文書を作成する。(仲委員)

- ・日本学術会議若手アカデミーのイノベーションに向けた社会連携分科会が、7/28(土)13:30～16:30 に日本学術会議講堂で開催する公開シンポジウム「若手アカデミーが考えるシチズンサイエンスに基づいた学術横断的社会連携」に当分科会が後援する旨を若手アカデミーの事務担当者(勝間田様)に連絡する。その際、当分科会メンバーに cc をつける。(高瀬委員)

- ・心理学教育の入口と出口に関する具体的プランを次回分科会で例示する。(村田光二氏、遠藤俊彦氏に話題提供を依頼)

- ・経済同友会など、企業の意思決定者の集まりと意見交換するべく、当該コミュニティへのアプローチするルートを探る。(各委員)

- ・高校の進路指導教員に効果的に情報伝達するためのアプローチを探る。(各委員)

- ・今後、「心理学の危機」を踏まえて、大学教育の入口と出口の問題を中心課題としたい(委員長)

- ・次期分科会の開催日程についてスケジュール調整を行う。(委員長)

以上